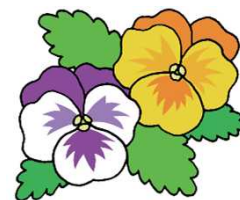


須賀川市教育研修センター・教育支援センターだより
「みち」 第146号
令和6年5月15日発行



学校教育アドバイザー訪問が始まりました！

学校教育アドバイザー訪問が須賀川市立第三小学校を皮切りに4月から各学校で始まっています。今年度は、新規の学校教育アドバイザー3名を含む6名の方々が各学校を訪問させていただいています。教職員の学びを充実させ、「授業と授業づくりを第一優先にした学校づくり」が進められることを期待しております。

また、新たに「校内研修のスタートにあたるコンサルテーション」も実施しております。この事業は、「年度初め、各学校で校内研修を進めるにあたって、本市学校教育課・教育研修センター指導主事が対話や講演によるコンサルテーションの機会を持つことにより、年間を通して教職員が意欲を持ち、円滑に研修を進めることができる」ことを目的に実施されています。このような研修も実施しておりますので、ぜひご活用ください。



学校指導委員委嘱状交付式・研修会

5月1日（水）、令和6年度須賀川市学校教育指導委員委嘱状交付式・第1回学校教育指導委員研修会が市役所で開かれました。今年度の学校教育指導委員は、幼稚園1名、小学校10名、中学校8名、義務教育学校1名の計20名の先生方に委嘱し、森合義衛教育長から委嘱状が交付されました。

委嘱状交付式の後、第1回研修会が行われ、教育研修センターの庄司康生指導主事、菅野哲哉指導主事から学校教育指導委員の任務と役割についての講話がありました。授業の動画などを見ながら、学校教育指導委員として、授業参観後のリフレクションでの授業者に対する支援（アドバイス）の仕方について学びました。



令和6年度教員ジャンプ・アップ研修もスタートしています。今年度は、17名の教員が希望されています。この研修は、授業や子どもとの向き合い方に不安や悩みを抱える教員が少しでも問題を解決し、教員として自信をもって職務に当たることができるようにするための研修で、講師や教職経験1～5年程度の教員や特別支援学級担当、通級指導教室担当、特別支援教育コーディネーターの経験が1～5年度程度の教員等が対象となっています。なお、研修はスタートしていますが、随時、希望を受け付けておりますので、センターまでご相談ください。

子ども自身の言葉を育てる(つくる)こと 《コラム No.09》

これまで何回か、古屋和久著「『学び合う教室文化』をすべての教室に」から、『聴く』ことについて書いてきました。今回は、聴くことの受動的能動性について書きました。今回は子ども自身の言葉を育てることについてです。

聴くことは受動的行為ですが、アクティブな行為でもあります。古屋さんは「アクティブな聴き方」を育てるにはまず教師がそのイメージをもつことが大切と言い、そして子どもたちに次のような力を育てたいと言います。

1. 相手が伝えたいことを自分の言葉で伝えることができる。
2. 相手がどこでそう考えたのか、根拠をさぐることができる。
3. 聴いた内容について、感想や考えたこと、疑問などを自分の言葉にする。

古屋さんは、「学び合い」の目的を子どもたち一人ひとりの「言葉づくり」だと言います。「言葉づくり」とは、考えをつくることであり、感じたことを表現すること、・・・そして「学ぶ」ことは自分のうちに言葉を持ち、言葉を育てることだと言います。

また、こうも言います。まったく言葉にできない子どもは、「学び合い」によって仲間から「足がかり」をもらいます。一度言葉にできてもそれで終わりではありません。「学び合い」で仲間の考えを聞いたり、仲間と資料を共有したりしながら、さらによい「言葉づくり」をめざすのです。

「千と千尋の神隠し」に、カオナシが出てきます。精神分析的には「顔(ペルソナ)」(外に向かう自分自身)を持たない存在ですが、実は(かろうじてちょっとの「声」があるにしても)言葉を持たない存在です。他人を丸呑みしてその言葉を喋るようになりますが最後は全部吐き出して、元に戻ってしまいます。結局自分の言葉を持たない「カオナシ」です。しかし、「学び合う」教室の子どもたちは、他者とかわり合いながら自分自身の言葉を持ち、育てていくことができるのです。私たち教師は、お仕着せでない子どもたち自身の言葉を育てなければなりません。

「聴き合う関係」は、すべての学びの必須の基礎です。



教育の質を高める5つ“まなざし”

教師にとって“まなざし”を向けるということは、教育の質を高めるためのとても重要な行為である。石井順治氏は、「まなざし」を5つに分類し、紹介している。

- 子どもへの“まなざし”
- 学習材への“まなざし”
- 子どものまなびへの“まなざし”
- 自分自身への“まなざし”
- 教師同士の“まなざし”



「教師にとって最も大切な“まなざし”は、子ども一人ひとりに対するものでなければならない。子どもの育ちと学びの深まりを目指して行うのが教育という仕事なのだから、その対象である子どもに向ける教師の“まなざし”は何よりも大切なものである。」

しかし、授業の中で、どの子どもに対しても、見逃さないように“まなざし”を向け続けるのはとても難しい。しかし、一つでも多く「見える」ようにしたいものだ。そのために、授業研究を行い、「見える」ようになるための努力を続けていく。教室をすべての子どもが生きられる場所にする、安心して学ぶことのできる場所にする、そのために、「すべての子どもへの“まなざし”」を忘れないようにしたい。

すこやか教室の開所式が、4月9日(火)に教育研修センターの2階で行われ、子ども達や保護者などが参加しました。開所式では、学校教育課の課長から挨拶があり、その中で「自分のことは、自分でしっかり考えていこう」というお話がありました。

もし不登校についてお困りの場合は気軽にご相談ください。

